

How to Design Classes of Physical Movement to Develop Nursery Students 1 : A Comprehensive Review on Researches about Physical and Athletic Ability of Nursery Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 暁子, 増田, 未来, 竹内, 秀一 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/496

保育者養成のための身体を動かす授業を考える 1

—保育学生の体力・運動能力調査に関する先行研究の把握—

How to Design Classes of Physical Movement to Develop Nursery
Students 1

— A Comprehensive Review on Researches about Physical and Athletic
Ability of Nursery Students —

川上 暁子^{*}
KAWAKAMI Akiko

増田 未来[†]
MASUDA Miku

竹内 秀一^{††}
TAKEUCHI Shuichi

1. はじめに

子どもの体力・運動能力の低下の問題¹は1960年代に指摘され始め、1980年代に顕著な結果が出て30年余りが経過した。子どもたちの運動の実態把握や、指導者の運動に対する意識調査、現場での遊びの実態調査などの量的研究が多く行われてきた。遊びの時間の在り方や保育環境などへの具体的な提案を行う質的研究も実施され、今後は研究成果を現場で活用していくことが期待される。今後も国の対策はもちろん、研究者が現場の教員や保育者と協同して、幼児期からの運動習慣の確立と基本的運動能力の底上げに対する取組みを維持していくことが必要である。

筆者らは、保育者養成課程で運動や身体表現の授業を担当する。子どもの体力低下の問題を考える時、子どもたちにとって身近であり影響力の大きい保育者に、運動に前向きにかつ積極的に取り組むよう望む。特に保育者の中でも若い人材が中心となって、子どもと一緒に身体を動かす活動に継続的に取り組んでほしい。養成段階に在籍し保育者を志す者（以下、保育学生）の実態²として、運動は好きだが得意とは言えない人が多いことが本学の調査では明らかになった。授業では、授業開始を告げても座っている状態からしばらく立ち上がらない場合や、幼児向け体操の見本になる動きを習得する際に肘や膝を伸ばさないまま行う人、ドッチボールを行うと半分以上のプレイヤーがコート内で逃げ惑うだけという状況、動きの創作をグループで行うと大半の授

^{*}武蔵野大学教育学部 [†]淑徳大学短期大学部 兼任講師 ^{††}学習院大学大学院

業時間が座り込みによる話合いに使われることなどが観察される。将来、彼女（彼）らが保育者となった時に、子どもたちと多様な運動の機会を共に行うことができるのだろうか。

身体を動かす活動の内容における、保育者の力量を高める研究の必要性を大変に感じている。さらに現場に出る前の保育学生たちに、体を動かす内容をどのように体験させ、現場での指導力にどうつなげるか検討することが、喫緊の重要な課題ではないかと考えている。保育者自身がのびのびと体を動かし、体を使った遊びを自在に発想して指導・支援することができる、そのような若い保育者を育成するため、保育者養成における体を動かして遊ぶ実践力を養う授業案の開発が求められている。

1978年の『体育の科学』に寄せられた記事で、幼稚園の運動指導について述べたものがある。子どもの体のおかしさが言われる中、一斉に子どもに体操をさせているだけでは、意味が無いという批判めいた指摘である。30年前の話だが、この運動指導のあり方は現在の幼稚園でも行われているのを見る機会がある。幼稚園の運動指導の実態を調べた研究で吉田ほか（1999）の研究がある。それによると約6割の園で外部の運動講師を呼び運動の実施をしているという。保育者が直接は運動指導に関わっていないか、もしくは指導の付き添いをするという状況が多いことが明らかになった。そうすると、養成課程の体育や身体表現の授業などで実施している身体を動かす内容は、現場では直接的に活かす機会が無いということになってしまう。この研究では続きがあって、一斉指導よりも自由遊びを中心に行っている園の子どもの方が体力・運動能力が高かったという結果であった。ただ自由遊びの方が効果的だからと言って、保育者が運動の時間に指導を放任して良いという意味にはならない。梅原（1999）が述べるように「運動遊び」が発展し充実するためには、運動技術の伝達をするのではなく、幼児が主体的に動けるように温かい励ましの言葉をかけながら、保育者が一緒に動くことという考え方が重要であるだろう。

2. 研究目的

本研究では、保育者養成のための身体を動かす授業プログラムの開発準備として、対象となる大学生、特に保育学生の体力・運動能力の調査結果を調べることを目的とする。また、保育学生の体力・運動能力の調査研究に関して、その考察を概観する。最後に保育者養成課程における身体を動かす授業の今後の課題を考え述べる。

本研究は、武蔵野大学学院特別研究費の助成を受けて行われた研究「保育者養成課程における体を使って遊ぶ能力を養うプログラムの考案」の成果の一部である。保育者養成課程において、子どもとの身体活動の場面に特化して、保育者としての実践力を養うプログラムの開発を目指す研究の端緒として書き始める。

3. 結果と考察

3-1 大学生の体力・運動能力の年次推移

今4年制の保育者養成課程にいる大学生（19～22歳）は、文科省の調査で子どもの体力・運動能力の低下が指摘された1980年代以降の誕生で、さらに幼児の体力・運動能力調査³において

結果の低下が顕著になった1997年に乳幼児期(0～3歳)を過ごしている。1997年の調査対象となった幼児(4～6歳)は、2016年現在は23～25歳であり、社会人として、そして保育者として働き出したことだろう。社会環境や生活様式の変化に起因して遊びが変化し、体を動かして遊んだ経験が不足する世代だと考えられているが、成長後、大学生になった時の体力・運動能力の結果はどうだろうか。幼児期にすでに体力低下の傾向にあったことが結果に影響を残すのだろうか。

文科省の調査から、新体力テストに移行後の18歳・19歳の男女と大学生18歳・19歳の男女の結果について、1999～2015年の間でその推移を見た。残念ながら幼児の体力・運動能力調査の、その同一対象者を縦断的に追跡して調査を行っているものは無かった。

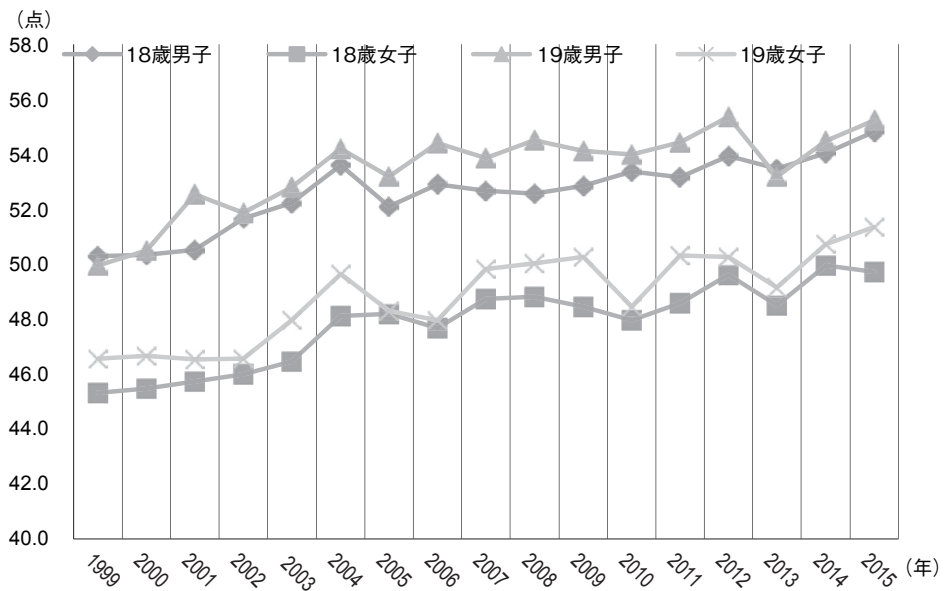


図1：体力・運動能力調査(18・19歳男女/合計点)

(文部科学省による体力・運動能力調査の結果より作成)

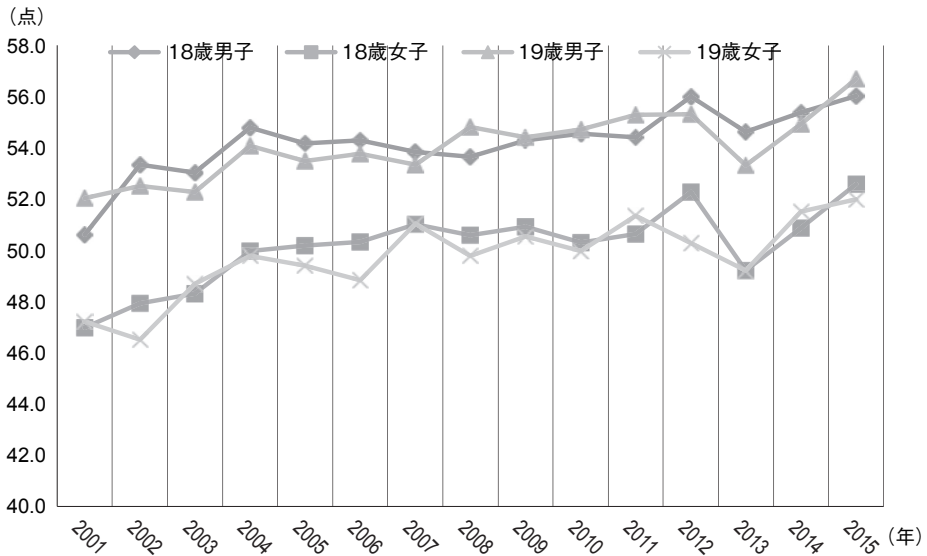


図2: 体力・運動能力調査 (大学生18・19歳男女/合計点)

(文部科学省による体力・運動能力調査の結果より作成)

これを見ると、18歳・19歳の男女と大学生18歳・19歳の男女の体力・運動能力調査における指標である合計点が、わずかだが右肩上がりの結果にあることが分かる。【図1・2参照】新体力テスト施行後、合計点の年次推移がほとんどの年代で緩やかな向上傾向にあると文科省は分析しており、18歳・19歳の結果も同様の傾向があると言える。続いて各種目の男女別の全国平均値を抜き出し、グラフ化したものを示す。【図3～20参照】

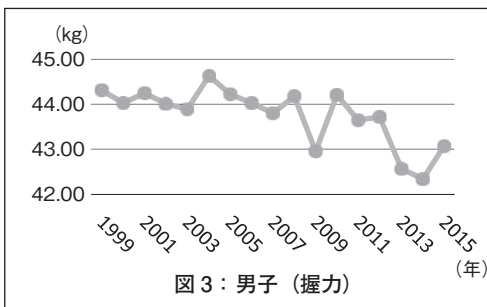


図3: 男子 (握力)

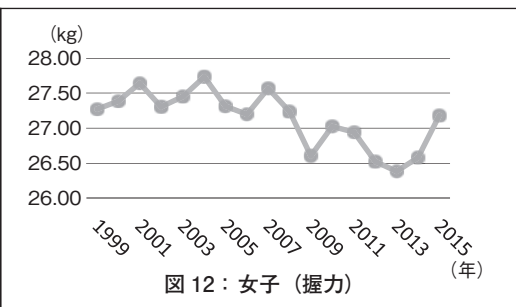


図12: 女子 (握力)

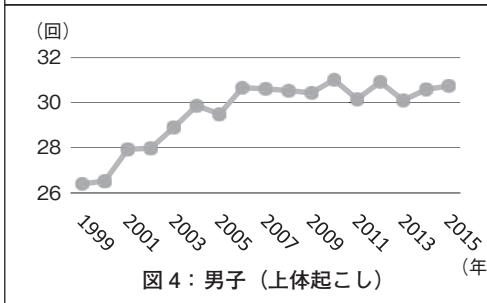


図4: 男子 (上体起こし)

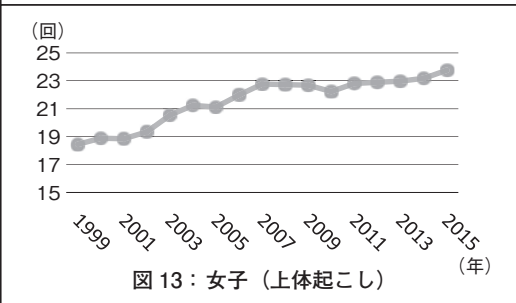
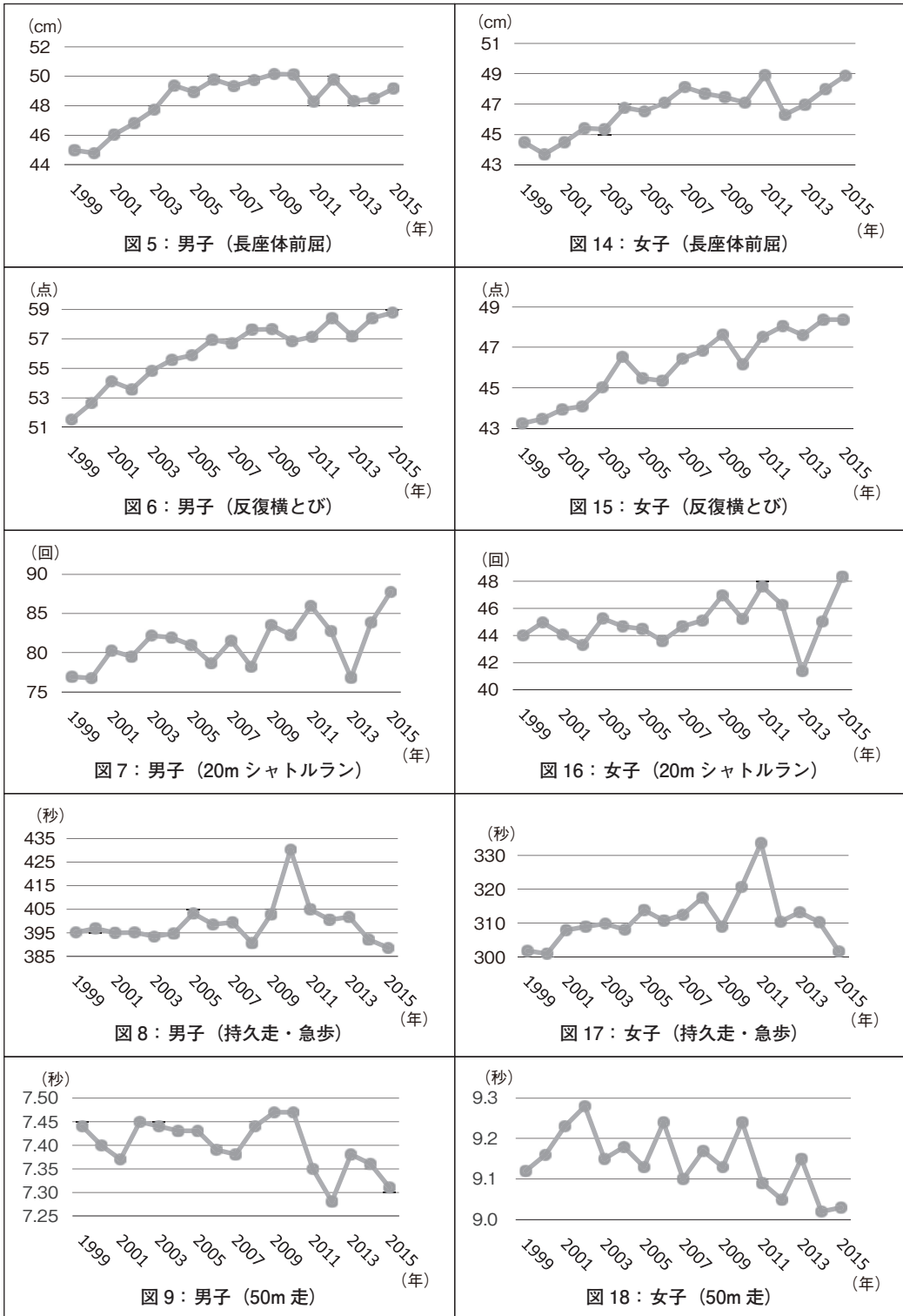
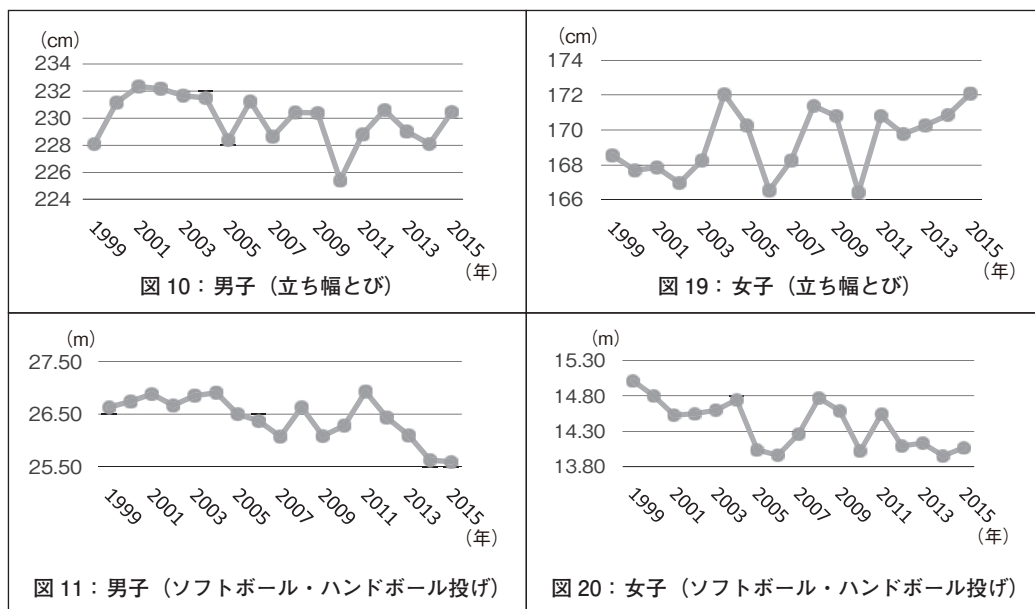


図13: 女子 (上体起こし)





(図3～20：文部科学省による体力・運動能力調査の結果より作成)

20mシャトルラン、50m走、持久走・急歩、および立ち幅とびについては、男女ともに特定の傾向はみられなかった。文科省は青少年の年次推移の傾向として、20mシャトルラン、50m走ではほとんどの年代で向上傾向、持久走と立ち幅とびでは横ばいまたは向上傾向としているが、今後の経過を追うべきだろう。上体起こしと長座体前屈は男女ともになぜか右肩上がり、反復横とびに関しては大幅な上昇傾向がみられ、一方で、握力とソフトボール投げでは男女ともに概ね低下傾向にあることが窺えた。下角ら（2013）は、青少年の体力の推移は1980年代をピークに1990年代に体力低下が言われ、2000年代には下げ止まりが表れたとする文科省の見解を引用している。続く2010年代は、文科省が述べる「上昇傾向の兆し」が続くかどうか種目ごとに経過観察が必要だと考える。

3-2 保育学生の体力・運動能力調査のこれまでの経過

保育学生の体力・運動能力については、どのような調査が行われてきたのか、これまでの研究とその発表年数を調べた。論文の抽出方法としては、CiNii（サイニイ Citation Information by NII）Articles⁴と国会図書館の検索エンジンを使ってキーワード検索のパターンをいくつか行い論文の件数をカウントした。キーワードは「保育_学生_体力」「保育_学生_運動」「幼児_学生_体力」「幼児_学生_運動」の4パターンである。重複して検索結果に表示された論文は、1件としてカウントし直した。年代ごとに論文件数を数えて、表にまとめたのが「表1」である。結果として、保育学生の体力に関する記述のある最も古い論文は1981年のものであった。論文件数は、1980～1989年は7件、1990～1999年では8件、2000～2009年は11件、2010～2016年に20件と、2000年代以降で論文本数が増加の傾向にあることが分かった。「表2」には、

2010年以降に行われた20件の研究の題目と発行機関を記載した。保育学生の体力・運動能力に関する調査が、近年、保育者養成や関連分野の研究者にとって関心のある事項であり、調査の必要がある事項と捉えられていると推考する。

[表1 年別の論文件数]

発表年	論文件数
2010～2016	20
2000～2009	11
1990～1999	8
1980～1989	7

[表2 2010～2016年に発表された先行研究]

年	題目	発行機関
2016	八戸学院短期大学幼児保育学科女子学生の日常における身体活動量と疲労度	八戸学院短期大学
	保育学生の体育・スポーツに対する意識について：2002年調査と2012年調査の比較から	横浜女子短期大学
	本学学生の体格・体力の結果と推移に関する一考察：保育科学生を焦点に	鶴見大学
	保育系女子短期大学における体力とストループ課題の推移	東九州短期大学
2015	保育科学生における筋力・柔軟性の実態と今後の教育課題	横浜女子短期大学
	保育者養成施設に在籍する女子学生の体力・運動能力調査	福岡子ども短期大学
2014	八戸学院短期大学性（幼児保育学科）の体力、食および睡眠習慣に関する調査	八戸学院短期大学
	小学校教員・保育者養成課程在籍学生の体力及び運動能力テストに関する調査報告（2010年度）	園田学園女子大学
2013	保育系女子大学生における体力とストループ課題の関係	中村学園大学
	保育学生の体力度（2）トレーニング効果の検証	和歌山信愛女子短期大学
	保育者養成課程における学生の身体活動に対する意識調査：身体表現と運動あそび・幼児体育との関連性について	大谷大学短期大学
2012	駒沢女子短期大学保育科学生の健康意識と体力との関係について	駒沢女子短期大学
	保育児童学科1年生の精神的健康と運動に関する調査研究	東京福祉大学
2011	保育者をめざす短期大学生の体力・運動能力の縦断的变化	新見公立大学
	保育学生の体力度（トレーニング効果の検証）	和歌山信愛女子短期大学
	保育者養成校における女子学生の運動・スポーツ好き嫌いとの関係について	貞静学園短期大学
	保育者養成課程における女子学生の運動経験に関する調査：幼児期から青年期に至るまでの運動経験	貞静学園短期大学
	国学院大学北海道短期大学部学生の体力・運動能力に関する基礎的研究（1）	国学院大学
2010	保育者養成校における体育授業に求められる課題について—幼児教育保育科学生の体力の現状より	洗足学園音楽大学
	保育者養成校における女子学生の運動・スポーツの好き嫌いとの関係について	貞静学園短期大学

新しい順に2010年代の研究から概要をまとめる。澤井（2016）はライフコーダによる身体活動量測定を行い、運動量や運動強度の観点から保育学生の身体活動量が少ないことを明らかにしている。川端ら（2014）は保育学生に対して体力・運動能力テストを行い、反復横跳び・20mシャトルラン・50m走・立ち幅跳びなどの下肢筋力が必要な移動系種目が、同世代（18歳・19歳・20～24歳）の全国平均との比較で低いことを示し、養成課程に入学する前の運動実施頻度や体力が影響すると推察している。渡部（2011）は、反復横跳び・20mシャトルラン・立ち幅跳びの数値が有意に下がったとして、養成課程の2年間で体力・運動能力が低下していることを明らかにしている。敏捷性や全身持久力、筋パワーが維持・向上される運動の実施機会を持たせるような対策が必要と述べている。2010年代の調査で、保育学生の身体活動量が低いこと、同世代の全国平均値よりも保育学生の体力・運動能力には低い種目があること、さらに養成課程に在籍中に体力・運動能力が低下することが示唆されている。

2000年代の研究では、智原（2005）は「保育者の生活史が保育に現れる」と述べて、生活習慣と体力調査を行なっている。それによると、男子は反復横跳び、立ち幅跳び以外19歳男子の平均値を上回ること、女子は、握力以外19歳女子の全国平均値を下回ること、女子学生が日常生活で体力不足を感じるという回答が8割、実習に体力不足を感じるという回答が5割と結果が示された。この結果を受けて、授業で運動の機会を保障すること、運動プログラムを多彩なものにすることと課題を述べている。

年代を遡って1990年代の研究の中から、室・森崎（1994）の研究について特筆したい。平成元年版の幼稚園教育要領の読み取りを踏まえて、保育者養成の専門科目「幼児体育」にどのような内容が必要なのか検討を行うと共に、保育学生の体力・運動能力調査の結果を全国平均と比べて提示している。結果としては、調査した15年間で大学生の全国平均は下降傾向にあること、中でも保育学生は全国平均と並ぶ年もあるが、その他の年は全国平均を下回ること、「瞬発力」「敏捷性」の種目は大差で劣ることを指摘している。さらにまとめとして、保育学生の体力要素は発達不足として、身体活動の経験が不十分であることを危惧している。さらに、入手することができた保育学生の体力・運動能力を扱う論文で最も古いものは、1983年に行われている室を中心とした研究であった。室は1980年代より継続的に保育学生の体力について調査・考察を行っており、それによると全国平均に並ぶ好結果であるが、この結果が一時的な結果ではないか経過を見る必要があるとまとめている。

室の1994年までのデータを最後に、ある程度まとまった期間の保育学生に対する体力・運動能力の調査研究は行われていない。先に概要を記述したように、2000年代以降は学校ごとの単年度調査で、文科省の同年代の全国平均との比較という研究パターンが多い。よって、年代別はその傾向を捉えたり、年代を追って変化を見たりすることは困難である。保育者養成校が連携して、各学校で調査した体力・運動能力調査の結果を集め、資料としてまとめていくことが今後は必要だと考える。

4. 保育者養成課程における体を動かす授業の課題

大学生の体力・運動能力について、全国平均としてはわずかだが上昇傾向にあることが分かっ

た。保育学生の体力・運動能力について先行研究を概観すると、全国平均よりも低い傾向を指摘する考察が年代を超えて散見される。保育者を志す学生の体力・運動能力が、同世代の中で平均すると低い傾向にあるのではないかと推考する。

保育学生に向けた身体を動かす授業の課題として、一つは、体験を重視することにあるだろう。体力・運動能力が低いということは、運動習慣が無いことや運動体験が少ないことが予想されるからである。実際に自身の体を動かして遊ぶことで、不得意な人でも楽しく運動にアプローチできるよう、また強制されるのではなく、運動への自発的な体験となることが重要だと考える。『幼稚園教育要領』・『保育所保育指針』（平成20年版）では運動遊びは健康の領域で身体表現は表現の表域と、別々の領域で扱われているのが現状である。しかし現場の支援・指導の場面に即して考えると、身体表現では運動遊びが導入として機能することや、運動遊びでは身体による表現遊びで身体部位の知覚を促すと効果的なことがある。理論上の分類は講義で理解するとして、運動は運動、表現は表現と区別したままの体験と学修では保育実践に向かない。包括的に「体を動かす遊び」と捉え、養成段階の内に運動や身体表現の多様な体験を積んで、子どもたちと積極的に遊びを展開することが将来的に可能となるように導きたい。

さらに、身体を動かす場面の指導には、動きのつながりある流れから、動きの基本的な要素を見抜くことが必須だと考える。運動経験が少ないとこれが難しい。例えば、スキップ、跳び箱、幼児向けの体操を行うにも、含まれる基本的な動きの要素を指導者が認識して、基本的な動きの要素へと変換し、段階を用意することが必要だ。しかし観察を通して、一連の動きの流れから要素の読み取りができないと、目標達成に向けた小さな段階を子どもたちに提案することはできない。よって、運動が不得意な保育者は、動きの基本的な要素の体験と習得、動きの一連を観察しその要素を読み取ることの練習が必要だろう。運動の観察と読み取りを練習することが、指導または支援を容易にする可能性がある。

5. おわりに

保育者を志す学生たちが、全国平均よりも体力・運動能力の低い傾向にあることを複数の先行研究から確認した。それによって運動経験が少ないと推測できることを述べ、今後の養成課程における身体活動の授業課題について検討した。保育学生の体力・運動能力について、低い傾向が長らく繰り返し指摘され、近年になって関連した研究が増えていることから、保育者養成における身体活動を扱う授業への課題が現前としてあることが分かった。

研究の次の展開として、幼稚園教育要領や保育所保育指針において、運動または身体を動かす内容がどう扱われてきたか、変遷を辿り、その内容について考察する必要性を考える。そこには、幼児期の子どもの教育または保育の内容がどうあるべきか明記されていると同時に、保育者に求める専門性についても示されているからである。保育者という職業に対する社会的な要請事項には、体力・運動能力の保持や、身体を動かす活動の実践力が、どの程度含まれてきたか。また、これを受けて、保育者養成における教育課程で身体を動かす内容と時間をどのくらい重要視してきたかについても着目したい。養成課程における身体活動の捉え方の変遷を把握することは、目標とする新たな身体を動かす授業プログラムに活かされると考える。

保育者という職業は、身体が資本であり、身体で子どもたちと向き合う仕事である。保育者の職業モデルの一つは、身体を動かすことに前向きで積極的である人物だと、今後も授業を通して提案したい。学生たちには、体力・運動能力を高め、運動経験を積み重ねていってほしい。保育者養成における身体を動かす授業について、調査・研究を継続していく予定である。

注

- 1 正木健雄は『子どもの体力』（1979）において、「近年、少年の体格は、学校保健統計報告書が示すとおり、いちじるしく向上しているが、体力や運動能力の発達は、必ずしもじゅうぶんとはいえない」という文部省体育局スポーツ課が1963年に発表した「スポーツテスト実施要項」の前書きを挙げて、政府に子どもの体力低下の予感があったのではないかと推察している（p.195）。1970年代には、保育者・教員が感じる子どもの体のおかしさに関する調査研究、阿部茂明ほかによる子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感を調査した研究が始まり、その調査を基にNHKが1978年に特集「警告！こどものからだは触まれている」を組むなど社会的に広く問題が認識されるようになった。続く1985年を境に、1964年から開始された文科省実施の児童・生徒の体力・運動能力の調査で、各年齢で各項目の平均値における低下傾向が指摘された。
- 2 2014年度の本学の保幼専修の学生への調査で、運動が「好き（「まあ好き」も含む）」は91.7%、「嫌い（「あまり好きではない」も含む）」が9.2%であるが、運動が「得意（「まあ得意」も含む）」は56.2%、「不得意（「あまり得意ではない」も含む）」は43.7%だった。2016年度の同様の調査では「好き（「まあ好き」も含む）」は85.5%、「嫌い（「あまり好きではない」も含む）」が14.4%であり、運動が「得意（「まあ得意」も含む）」は53.6%、「不得意（「あまり得意ではない」も含む）」は46.3%という結果だった。運動が「好き」であり「得意」でもあると回答した保育学生は2014年度が96名の内4名、2016年度が69名の内9名だった。
- 3 森司朗らによる『最近の幼児の運動能力：1986年と1997年の比較』（1998）によると、文科省による調査から小学校低学年から体力・運動能力の低下傾向が報告されているが、その傾向が何歳くらいから生じているのか不明だったため全国的な幼児の調査が始まった。1966年から実施され、1997年の結果が1986年よりも低下することが顕著となった。
- 4 国立情報学研究所（NII National institute of informatics）が運営する学術論文などの学術情報データベース。約1,700万の学術論文情報が収録されている。

参考文献

子どもの体力低下に関する論文

- 阿部茂明「子どもの“からだのおかしさ”に関する保育・教育現場の実感—『子どものからだの調査2010』の結果を基に—」日本体育大学紀要41（1）、2011
- 石井友光・古谷優「保育者の介入行動が幼児の運動意識及び活動量に及ぼす影響—幼児の運動に対する意識調査との関係—」帝京平成大学紀要第22巻、2011
- 神奈川県立体育センター「子どもの体力及び運動能力の向上に関する研究」研究報告書、2009
- 正木健雄「子どもの体力」大月書店、1979
- 南貞己「幼児の運動能力発達の年次推移」日本体育学会大会号（25）、1974
- 森司朗ほか「最近の幼児の運動能力—1986年と1997年の比較」日本体育学会大会号（49）、1998
- 森司朗ほか「1966年から2002年にいたる幼児の運動能力発達の年次推移」日本体育学会大会号54、2003
- 森司朗ほか「2008年の全国調査から見た幼児の運動能力」日本体育学会大会予稿集（60）、2009
- 村岡眞澄「運動遊びにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助（1）鬼遊びの場面で」愛知教育大学幼児教育研究4、1995
- 村岡眞澄・松本秀子「幼児の運動場面における遊び意欲の形成と保育者の指導—3～5歳までの経過をふまえて—」日本保育学会大会研究論文集53、2000

- 杉原隆「運動発達を阻害する運動指導」幼児の教育, 2008
- 梅原俊子「幼児の運動遊びにおける保育者の運動観察」日本保育学会大会研究論文集(52), 1999
- 吉田伊津美ほか「幼児の運動能力の発達と園環境・家庭環境・遊びの傾向との関係」日本体育学会大会号(50), 1999
- 吉田伊津美ほか「幼稚園における健康・体力づくりの意識と運動指導の実態」東京学芸大学紀要総合教育科学系58, 2007
- 吉田伊津美・岩崎洋子「幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識:国公立幼稚園と私立幼稚園との比較」東京学芸大学紀要総合教育科学系63(1), 2012
- 吉田伊津美・岩崎洋子「園での運動遊び指導と運動遊び指導に対する幼稚園教諭の認識—園での運動遊び指導に対する満足度と技術指導志向からの検討—」発育発達研究第64号, 2014
- 吉武信二「幼児期における身体教育指導に関する研究:保育士を対象とした実態調査から」社会問題研究63, 2014
- 松延博「体操の考え方—乳幼児教育の立場から—」体育の科学, 日本体育学会編集, 1978

大学生の体力・運動能力調査に関する資料・論文

- 宮元章次・日高久美子「宮崎公立大学生の体格・体力の推移について」宮崎公立大学人文学部紀要, 2005
- 文部科学省 政府統計の総合窓口e-Stat
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/1261241.htm
- 文部科学省 平成27年度体力・運動能力調査報告書, 2016
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1377959.htm
- 下門 洋文・中田由夫・富川理充・高木英樹・征矢英昭「大学生における26年間の体型と体力の推移とその関連性」体育学研究58, 2013

保育学生の体力に関する論文

- 板谷昭彦ほか「小学校教員・保育者養成課程在籍学生の体力及び運動能力テストに関する調査報告(2010年度)」園田学園女子大学論文集48, pp.27-44, 2014
- 川端悠ほか「八戸学院短期大学性(幼児保育学科)の体力,食および睡眠習慣に関する調査」八戸学院短期大学研究紀要39, pp.1-9, 2014
- 川口愛子「保育科学生の運動経験に関する流研究:高校体育の体験運動領域および選択制について」日本保育学会大会研究論文集52, pp.366-367, 1999
- 森博文ほか「幼児・学童期における遊び体験に関する研究:幼児教育専攻学生に対する調査から」九州女子大学紀要 人文・社会科学編39(1), pp.31-44, 2002
- 室みどり「新しい保育展開の中に見る保育学生の体力度:運動あそびの指導面に関連して」親愛紀要34, pp.61-68, 1994
- 澤井陸美「八戸学院短期大学幼児保育学科女子学生の日常における身体活動量と疲労度」八戸学院短期大学研究紀要42, pp.9-20, 2016
- 俱原江美「体力テスト及び生活リズム調査からみた保育者養成校のカリキュラムへの提案」研究紀要13, pp.67-78, 2005
- 宇佐美かおるほか「駒沢女子短期大学保育科学生の健康意識と体力との関係について」研究紀要45, pp.49-52, 2012
- 渡部昌史「保育者を目指す短期大学生の体力・運動能力の縦断的变化」新見公立大学紀要32, pp.107-110, 2011
- 柳瀬慶子「保育者養成課程における学生の体育館構築に向けた基礎的研究—体育(運動)に対する意識調査を通して—」高田短期大学紀要33, pp.49-57, 2015